

## ❀ 談山神社における彩色と塗装の材料調査

日本には古くからの木造建造物が多数現存しており、日本の文化の一端を担っています。これは、状態の良い部材は残し、悪い部材は取り替えるといった伝統的な修理によるものといえます。修理に関する考え方は塗装についても同様で、長い年月の経年劣化によって剥離や粉状化した塗膜は掻き落とされ、新たに塗り直しをおこないます。この時使用される材料は、原則として過去の修理で使用されていた材料と同じものを用います。そのため、当時のような塗装材料が用いられていたかを正しく理解することは、修理において、とても重要な意味を持つといえます。

奈良県桜井市にある談山神社は、十三重塔等多くの建造物が重要文化財に指定されています。近年、談山神社の各建造物は、経年劣化にともない、平成の大修理がおこなわれました。

保存修復科学研究室では、権殿ごんでんの内外装の彩色と塗装について80点以上の調査を実施しました。その結果、寛文または享保期の修理と思われる塗膜から、塗装材料として、油、松脂そして鉛が検出されました。この塗装については、修理に関する古文書から、「ちやん」という“ぬり”にあたるのではないかと考えられています。この塗装は日が当たりやすい外装の部材で確認されましたが、内装の部材では確認されませんでした。当時の職人は、耐候性を考え、あえて油系の塗料を使用したのかもしれませんが。

現在の談山神社は修理も終わり、権殿は「ちやん」塗で美しく仕上げられました。四季を堪能できることで有名な談山神社ですが、「ちやん」塗の権殿は四季にどのように映えるのでしょうか。

(埋蔵文化財センター 赤田 昌倫)



談山神社での蛍光エックス線分析の様子